



女臭^{メンドウ}

執筆
挿絵

…ももえもじ
AN-58(あんどは)

あらすじ

女子バレーボール部のイケメン男子マネージャー…順玉 怜（すのう れい）
体育会系ばかりが集まった女子バレー部のアイドル的な存在である。
しかし、顔良し、頭良し、気配り抜群の、憧れの完璧なる男子マネージャーにも、
たった1つだけ致命的な欠陥があった。

「重度の臭いフェチ」

部活が終わり、全員の帰宅を確認した後。

怜は、忍び込んだ部室で自慰へと溺れる毎日を送っていた。

先程まで20名の部員が着替えていた部室。汗だくながら、いつも帰る前に長々と
雑談するものだから、これでもかと女の臭いが染みついた部室。

手には、汗に塗れた女子たちの体育着。部員20名分のタオル。

クールで誠実（そしてイケメン）という点から、女子たちも安心して洗濯係りを
任せたにも拘わらずの背信行為だった。

ある日に、違和感を抱いた女子が部室に監視カメラを設置する。

それにより、怜の悪癖は、あつさりと明るみになってしまう。

深い失望感を味わう女子たち。怒りと悲しみ。

だけど、相手は憧れのイケメンマネージャー。面喰いな女子たちは憎み切れない。やがて女子たちは、負い目という優位性を用いれば、憧れの怜を女子バレー部のペットに出来ると気付く。

第一話 性の扉

順玉^{すのうれい}怜は、同年代の男子に比べて感情が乏しかった。

合理主義で気高い両親のエゴが怜から『多感』を失わせたのだ。

同い年の男子が下ネタで盛り上がったたり、エロサイトで興奮する中で自分だけが感情的になれない。植え付けられた絶対的な理性が感情を阻む。つまりは、どんな物事にも夢中になれなかった。

もつと、みんなと笑いたいのに。もつと、恋愛にマジになりたいのに。

……きつと自分は、死ぬまでなにか一つにも本気になれないのだろう。

クールを気取って、きつと最後の最後で後悔するのだろう。

全力で喜怒哀楽を表現したい人生だった。

……なんて、若き頃から悟る程であった。

しかし、そんな悩みは杞憂だったと分かる。

難攻不落だった理性は、ある日にあっさりとぶち壊れたのだ。

唐突に訪れた、その時。

「う、あっ……!？」

大会が近い時期であり、部活が終わる頃は、いつも外が真っ暗だった。

もう学校に残っている者は殆どおらず、静かな風の音が気持ち良く響いている。人目を気にすることもなく、初めて足を踏み入れる女子バレー部の部室。

忍び込んで間もなく怜は、そこで遂に味わう感情の沸騰に眩暈を覚えた。

最初に脳が揺れて、続いて膝が震える。猛烈な速度で体温の上昇を感じたのだ。

「あ、ああっ、な、なんだ、これ、すげえ臭いだな……」

「ちよ、ちよっと、大丈夫ですかっ!? 立ち眩み？」

「あ、う、うん。少し疲れてるのかな。ちよっと休むでしょう」

「怜ちゃんはマネージャーで座りっぱなしでしょくに。疲れてるのは、さっきまで部活やってたアタシの方なんですからね」

「……………」

部室に入った途端に鼻を刺した強烈な臭いが原因である。

当然だろう。こんな夏場だ。

過酷な運動でなくても汗だくになるのは必至。大会間近で夜遅くまで練習をする女子バレーボール部員の20人が、つい五分前まで一斉に着替えていた場所なのだ。

こびりついた汗の臭い。女の……臭い。

扉を開けた瞬間に、それら充滿した空気が爆発したように怜を飲み込んだのだ。ただでさえ暑い夏の風。それよりも一層に蒸れた女の臭いが押し寄せる。

女の匂いなんて、普段の部活や学校生活で慣れてる筈だったのに……

今日まで理性的に生きてきた怜。全ての感情を客観的に詠み続けてきた怜。

そんな怜が初めて言葉を失った瞬間だった。

「大丈夫ですか？　なんか汗だくですけど」

「……お前ほどじゃないだろ」

「だ、だからあゝ、さっきまで運動してたのはアタシらの方ですから。これでもだいぶ汗が引いた方ですよ。部活終わりとかヤバイですもん」

「……部室は、臭いが籠ってるな」

「あはは、めっちゃ臭いですよね。これが女の現実ってヤツ？　換気しておけば良かった。部室はアタシもちよっと恥ずかしいかも」

そう笑いながら、怜の肩を何度も撫でる女子。東田美希^{ひがしだ みき}という一年生である。

新人にも拘わらず、男子マネージャーにして二年生の怜を「ちゃん」付けしては、堂々と好意を寄せるお調子者の女の子だ。バレーボールサイズの巨乳が特徴であり、大きく揺らしながら、忍ぶように怜と部室に入る。特に付き合ってる訳ではない。

容姿、運動、学力が優れている上に、常に冷静沈着な怜は女子からの人気が高く、在籍する20人もの部員たちも、いわゆる「推し」として扱っている。いくら豪快な性格の美希も、流石に一年生の身で奪い取る気はなかった。

ほぼ片想いの状態が続く中。ある日に、二人きりになる機会が訪れる。

予想外に距離が縮んでしまい、そこからの勢いで身体の関係までは一瞬だった。

喋っていくうちに気心が知れて、やがて物理的にも距離が近くなり、次の日には部活終わりの真つ暗な教室で情欲に馳せていた。

付き合う訳ではない。ただ、仲良くなった男女が発散しているだけである。

わざわざ周囲に言う必要は無いだろう……

男女のスキンシップは効率の良いストレス解消だろう……

恋愛感情は不要。単なる肉体関係。美希の性格なら受け入れてくれるだろう……と、怜らしい合理的な考えだった。

前日は教室での行為。今日は女子の部室。

この、部室という選択が怜の人生を大きく捻じ曲げる。

徹底した合理主義の怜は、これまで真面に恋愛感情を抱いた経験がない。

最大限に興奮したこともない。

男女の営みは好きだけど、そんなものに夢中になるつもりはなかった。

しかし、いつだって机上の空論なのだ。

築き上げてきた自尊心は砂上の楼閣。ふとした切っ掛けで容易く崩壊する。

眩暈の正体は、生まれて味わう圧倒的な感情。情欲の開花。

無意識に、心配して寄り添っていた美希を思い切り抱き締めている。

「あつ、怜ちゃんっ、だ、大胆っ、マジ？　こんなの初めてっ……」

不意打ちのハグ。美希の顔が一瞬で真っ赤になる。

普段あれだけ蟲惑的に装っても、やはり根底はウブらしい。

初めて怜からの動きに、やっと引いた汗が再発する。いきなりだった。

「悪い。急に」

「い、いえ……あ、そ、その、う、嬉しいです……マジで。いつも、怜ちゃん……」

エッチもあんまり乗り気じゃなさそうな感じしてたから。アタシの我儘に無理やり

付き合ってたのかな、って。あッ、首ッ、舐められてッ、んんんっ、嬉しいですよ、

ううううっ」

「すう、はあ、すう、はあ……んっ、ああ、ヤバい。ちよっ、俺に乗っかって」

「は、はい……」

美希の告白をまるで無視して我儘に命令する。こんな姿も初めてだろう。

部室のベンチに座り、更に対面するように怜の上へと美希を跨がせる。

美希の首筋を舐めたかと思いきや、そのままうなじへと鼻を埋めていた。そして、思い切り深呼吸。情状酌量の無い、怜は明らかな臭いフェチだった。誰にも打ち明けたことのない話。元々、怜は女子の匂いが好きだったのだ。日常にて、女子と擦れ違う際には必ず匂いを味わい、その度に高揚感を昇らせていた。ハグをした時も必ず、それこそソムリエのように頭髪を嗅ぐわう自分がいる。まあ、これくらいはフェチというより、誰にでもありそうな癖だろう。

ただ、どうやら怜の嗜好は「良い匂い」に限らないことに気付く。

下駄箱に並べられた女子の上履き。或いは靴……

脱ぎ捨てられた女子の小汚い靴下。部活中の汗を拭った、女子のタオル……

汗で汚れたユニフォーム。汗が染みた女子たちのユニフォームの脇汗……

或いは、もつともつとセンチティブな……

おおよそ良い匂いとは言えないだろう臭気にこそ傾倒していたことに。

本当に、それらの臭いを味わう甘美を、ふっと妄想してしまっていることに……

ただ、そこは理性的な怜。勿論、誰も居ない下駄箱に手を伸ばしたことは無い。

誠実（且つ、イケメン）なマネージャーの特権で毎日渡される女子の洗濯物にも、

一度だって触手を伸ばしていない。考慮にも値してなかった。

だけど、偶然でもなんでも、中毒とは一度でも味を知ってしまったえば萌芽する。

女子たちが着替えていた部室。

まだ汗の残り香があり、籠った臭いが初めて怜の理性を上回った。

怜の性癖を自認させた。

「んあっ、キ、キスッ、怜ちゃんからっ、初めてしてくれたッ、ああ、嬉しいです。あはは、アタシを馬鹿にした先輩たち、ざまーみろ。怜ちゃん、独占してるよおっ、んっ、ちゅっ、怜ちゃん、大好き、大好きですう……♡」

なにやら愛を囁く美希に申し訳ない。怜の思考は、それどころではなかった。部室の臭いだけでイッてしまいそうな程に高まった状態だ。

股座に乗せた美希がモゾモゾと動き、勃起したペニスがグリグリと刺激されると、怜は生まれて初めて射精欲に苛まれる。生まれて初めて性的快感に火が付く。

「怜ちヤッ……お尻に怜ちゃんのっ、硬いモノがあっ、あああん、はあっ、はあっ、お尻でグリグリしてます……いつもより、なんか、硬いっ、んんっ、キスも情熱的や、やっつと、アタシの想いが伝わった感じ？ んっ、ちゅっ、ちゅ……」

「はあ、はあ、なんか信じられんくらい興奮してるわ。このままイキそうだよ」
「あああ、イッちやっつて。ズボン穿いたまま、イッちやっつてえ♡」

大きく盛り上がったテントがお尻に潰されたまま、ゆっさゆっさと揺れる美希。その心地を、部室の香りが助長してくる。もう既に限界を迎えていた。

（女の臭いってヤバいな。密室に籠った女の臭い。20人の女の……）

（いつもの香水やシャンプーで誤魔化された良い匂いじゃない。汗で全ての匂いが洗い流されていて、これぞ飾りっ気のない本当の女の臭いって感じだ!!）

急速な勢いで萌芽する。

同時に、一刻と薄れていく部室の香りに、急いた怜が自ら腰を振るっていく。
いまは制服を着ている。

こんな状態で絶頂に達するなんて、普段の理性的な怜では絶対に有り得ない。
でも、それでも……

止まらなかった。いまの動きを止めたくなかった。

「ああんつつ、グリグリされてるっ、気持ち良い……私のパンツに擦れて気持ち良いですう、ってかつ、怜ちゃんの顔っ、めっちゃ蕩けてます……こんな、いつもクールな怜ちゃんっ、女子にモテモテな怜ちゃんの、めっちゃ情けない顔がこんな間近でッ……あああ、ヤバくくく!!」

「くううつ、イツちゃう。イ、イクぞっ、ああああくくっ!!」

ドクドクドクドクッ!!

美希の腰使いが緩慢な所為で、絶頂から射精までのストロークが長かった。

沸々と、ゆつくりと、精液が競り上がる感覚。

その間が恐らく男の感性を最大限に活発化させる。

じわじわと長いストロークに味わう、女の臭い。感極まって垂れ流された美希の涎も良い塩梅であり、そして初めての性的興奮に身を委ねた射精は過去一の快楽を伴った。

「ああああああくくんっ、ドクドク言ってますっ!! 怜ちゃん……先輩……ドクドク言ってるっ、これ、股間で感じるの、ヤバくくく」

「い、いままでで一番良かったかも……♡ あ、い、いや、挿入れていた時の方が気持ち良いんですけど、その、なんか心が満たされた感じ。ヤバかったです♡」

「怜ちゃんってば女たらし。ホントに、独占しちやいたいですう……」

「あ、あの、これで終わりじゃないですよ？ その、続きを……」

「って、聞いてます？」

美希も同時にエクスタシーを味わったらしい。

しかし、怜の耳には一切届いてなかった。

よく、ニュースとかで目にする「興奮を抑えられなかった」とか抜かす性犯罪者。怜は、心の底から見下していた。

マジで猿だな、と。

なんて理性が弱いんだ。本当に自分と同じ人間の仕業なのか、と。

考えるチカラは無いのか。自分は知性的で良かった、と。

でも……この時。一瞬だけ……「なるほどな」と、思い至る。

そして始まる、怜の倒錯。臭気に満ちる恥さらしな第二の人生。

夜の教室では警備員に見つかるからと、なんとなく女子の部室に移動したこと。こんな些細な切っ掛けで怜の人生が大きく変わってしまう。

第二話 クンニはナマよりブルマ越し

どうして、こんなことになってしまったのだろう。

中学の頃は、男子バレーのMVPに選ばれるような才能の塊りだったのに……恵まれた高身長。才能。

それだけでも羨望モノなのに、王子様と呼ばれるルックスの持ち主という。その名に恥じないようと、社交性や成績まで抜群なのだからタチが悪い。そもそも、女子の比率が高い学校へと進学である。

これでモテない訳が無い。常識の如くモテモテ。予定調和のハーレム人生。女子バレー部員からは、みんなの憧れのような存在だった。

バレー部以外からも、例えばクラスメイトの女子から告白されたり……知らない女子から連絡先を聞かれたり……

廊下を歩けば、常に視線が付きまとうような。男の妬みが権化した存在だった。しかし……ある日に覆る。これまでの印象が一瞬で引っ繰り返ってしまう。

美希と忍び込んだ女子バレー部の部室。

汗だくの女子部員20人が、いつも部活終わりに密集する部室。

二畳程度の広さの狭い部室に籠った、女たちの赤裸々な体臭。汗の湿度。

ムレムレで甘酸っぱさと、湿ったような汗の臭いが入り雑じった空気……

そこで性癖が開花してから、これまでの人格が嘘だったかのように裏返る。

それからというもの、怜は部活終わりの夜更けに部室へと忍び込むようになった。

美希は居ない。美希が居ては浸れない。と、独りで忍び込む夜な夜な。

なんという転落振りだろう。

王子様と呼ばれていた所以には、寡黙で理性的という人格者こそなのに。

女子全員が帰るまで陰に隠れては、鼻息を荒く。こっそり部室に忍び込む様子は、

これまで怜が嫌悪してきた変質者でしかなかった。

たった一つの切っ掛けで人格は破綻する。

「うう、先輩。信じてたのに……」

「私、怜先輩のこと好きだったのに。うう、恥ずかしい」

「あーあ、まさか怜が臭いフェチだったなんてショックだわあ」

「怜くん。どうすれば良かったの？　こんなことになるなんてさ」

「言ってくれれば、靴下でもユニフォームでも、なんでもあげたのに……」

ある日の女子の部室にて。バレ―部員が全員集合していた。まだ部活が始まる前であり、陽の光が窓に差し込む時間帯。

ただ、電気を消しているので薄暗さは否めず、そして場の空気を表現するように室内がピリ付いていた。

狭い部室に女子がぎゅうぎゅう……に、胸を打たれる余裕なんて無い。

部室の中央に座るのは、みんなの憧れだった怜である。

常日頃から、尊敬や恋の眼差しを向けられていたアイドルである。

男の嫉妬を集めていた存在。モテ男の権化だった存在である。

しかし、いま降り注ぐ視線の色は、どうも芳しくない。

いまにも泣き出しそうな表情を浮かべる女子。いままでに見せたことのない表情。そんな女子部員たちが怜を囲んでいる。狭い部室に20人全員が無理矢理に入って、十人十色の眼差しで怜を見下ろしていた。

当然である。悪いことすれば、必ず身に返ると言うのだから。

つまり、ここ暫く続けていた怜の「お忍び」がバレてしまったのだ。

『なんか最近さ。部室ヘンな臭いしない？ 物も無くなってる気がするんだけど』

『あ、それ私も思った。キモい監督が忍び込んでたりして……うわ、ゾっとする』
なんて。違和感を抱いた女子の一人が隠しカメラを設置した翌日にバレたのだ。



動画には、なんとも間の抜けた様子で女子のユニフォームへと顔を埋める怜の、普段からは想像の付かない下衆な顔にて、哀れに反り返るペニスを扱く姿があつた。部活直後で汗だくになった女子の運動着を頭から被り、物凄い勢いで呼吸を繰り返している。室内は女子の体臭に満ちており、表情は見えなくとも怜の興奮は火を見るよりも明らかだった。

そんな動画にショックを受ける女子たち。

まさか怜が。どうして怜が？ 動画を見た現在でも信じられない。

怜に怒る者、悲しむ者、中には泣き出す者まで居た。

無理もない。みんなの憧れだったのに……

さあ、どうしよう？ ということで部室に集まった次第である。

先生に報告する？

というか、警察案件？

腹いせに動画を拡散させようか？

……本件に最も嫌悪感を示したのは、木枝智花^{きえたともか}という三年生だった。

日頃は眼鏡を掛けて、髪型も三つ編みで揃えているという、まるでアニメに出てくるような風紀委員の女子。というより、実際に風紀委員に所属しており、規律を重んじた真面目な存在である。部活にも意欲的であり、副部長も勤めている。

だからこそ、優等生だった怜を評価してただけに、今回の一件で激怒していた。みんなに尊敬されて、慕われていたから、女子の部室の出入りも自由だった。みんなに信用されていたから、部員たちも安心してユニフォームを預けていた。それなのに……と、智花が激昂するのも尤もだ。

「こんなの、先生に報告するしか無いでしょ!!」

「……………」

同調を求める智花。だが、それ以外の部員は複雑な表情を浮かべていた。そんなの、出来る訳が無い。報告すれば、停学は確実だろう。

学校一のイケメン。学生バレー界隈のアイドルの不祥事……

もしも学校全体に知れ渡ったら、どうなるか分かったもんじゃない。

だからと言って、どうして良いか分からず、黙ってしまう一同。

関係の深い美希もショックを受けている。というより、内心で憤怒していた。

（最近構ってくれないと思ったら、部室でオナニーしてた訳？ 私より私の着てた体育着に欲情してたって訳？ 意味分かんない。気持ち悪い。苛々するツ!!）

「まあまあ、この件は保留にしようか。ひとまずね」

と、堪りかねて口を開いたのは、部長である日比谷亜香里^{ひびや あかり}。

「そんな……!!」

智花が不満を露わにするも、部長の言葉にはホツとした空気が流れた気がした。

「それじゃあ、部活あるから……」

オオゴトにはしたくないということで現状維持。

しかし、これから部活だけど流石に一緒には居られないと亜香里は言い、非情に
気まずい雰囲気の中で、今日は帰ってもらおうようにと怜を促すのだった。

………

………

………

「はあ……マジ衝撃的だったね。憧れてたのになー」

「王子様から転落だね」

「……ねえ。ってかさ。怜先輩のアソコ……めっちゃデカくなかった？」

「うんうん。凄いよねえー。怜さんイケメンで巨根ってマジ無敵じゃん」

「それより私は、興奮しきってた怜先輩マジ可愛かったな。あんなん初めて見た」

「それな。美希はどう？」

「……え？」

今日も部活はあり、暫くすれば顧問も体育館に顔を出しに来る。

普段通りにする為にも、仕方なしに女子たちが部活の準備に取り掛かる。

それぞれ仲良しグループに別れれば、言わずもがな話題は怜のこと。一年生グループは、強かにも興奮した面持ちで話に花を咲かせていた。こんな反応は美希も意外だった。

「あ、あのさ。みんな平気なの？ 怜ちゃん……怜先輩のこと」

「いや、まあ……ドン引きではあるけどさ」

「なんだろうね。私は全然。あんま現実味が無いってか。後で実感するのかな？」
「……………」

「ゲイ疑惑まであった怜先輩が、ちゃんと女子に興味あつて良かったなー、寧ろ」
「いや、確かに怜先輩クールだけど、割と女の子に手え出してる噂だよ」

「あ、マジ？」

「そうよねえ、美希？」

「な、なんでアタシに振るのさ。もう良いでしょ。早く準備行こうよっ」

「あらら。美希、あんな好きだった先輩のこと、一気に嫌いになったっぽい？」
「……………」

好きな人とは両想いになりたいものだ。

とはいえ、片想いも青春っぽくて好き。恋してるだけでもオンナは幸せなのだ。だけど、怜はそんな時間も与えてはくれず、肉体関係まで早かった。

ふわふわと宙を漂う想い。挙句の、この始末である。

やり場のない不安定な感情が美希を取り巻く。

最も近い感情は、やはり怒り。この気持ちを友人と共有したかったのに……

なんでコイツ等は、こんなにも軽いのか。処女の癖に……

所謂のフラストレーションだった。

（こんな気持ちで部活なんか出来る訳ないじゃん）

未だに軽口で怜について盛り上がる友人たち。気付けば、一歩後ろで歩いている

美希。耳を澄ますと「いまの先輩なら、マジでなんでも言うこと聞くんじゃね？」

なんて笑い合う声が聞こえてくる。

その通りだろう。その通りだ。

「……ちよっと先に行つてて」

美希は、体育館とは反対方向へと進路を変えてスマホを取り出すのだった。

「怜ちゃん」

「……もう二度と口きいてくれないものと思ったけど」

そして時の人を呼び出す。自分のクラスこと、一年二組に急いで来るようにと。

怜は、あっさりと来た。

いつもの軽口を叩くものの、事件の直後だけあつて流石に憔悴していた。

「はあ、みんなドン引きしてたよ」

「……そりやそうだ」

「なんで、あんなことを？」

「目覚めたのかも」

「目覚めたって、なにに？」

「……臭いフエチに」

「ええ……」

「美希と、部室でヤツた時に」

「えッ、あん時に!？」

「うん……」

「……」

一年二組の教室に、怜と美希の二人つきり。

窓際の机に美希が座り、一步離れた所で怜が俯いている。

明らかに顔色が悪い。美希にとって初めて目にする表情だ。

口調こそ変わらないけど、一々言葉を選んでいるような惨めさを感じた。

一瞬、同情しそうになる所を自ら戒める。なんとなく気まずさを感じて外に目を

やる美希。一年二組は、バレー部の部室も体育館も見える位置だった。

体育館では、もう部活が始まっている。

本来は自分も居るべき場所なのに、教室から見下ろしているなんて変な気分だ。しかも、隣には時の問題児である。美希は決意した。

「ねえ、アタシめちやくちや怒ってんの分かってる？」

「あ、ああ。申し訳ない……本当に、なにをしてでも償いたいよ」

「それ、なにに対して謝ってんの？」

「え？ その、みんな裏切ったこととか……」

「……………」

「あ、あと。美希の誘いを断ったのとかも……」

「あー、はいはいッ。ってか、なに立ってんの？ 座ってよ、床に。そのまんま」

「え？ こ、この床に？ いま？」

「分かっていると思うけどさあ、もう怜ちゃんにカリスマ無いからね？」

「……………」

「アタシの言うこと、なんでも聞きなよ」

「……分かった」

「……………」

ゾクリ。

美希に反発することもなく、怜は静かに床へと正座した。やっぱり、怜は明らかに衰弱していた。怯えていた。

当然である。賢い怜は、既にあらゆる可能性を想定しているのだろう。

今回の件を先生に報告された場合の処遇。最悪、警察にお世話になる可能性も。自分を慕っていた全てに嫌われる未来。死ぬまで両親や兄妹に蔑まれる人生。それを考えると、万が一にも逆らえない。

もう既に、怜は女子バレー部という呪縛に囚われていた。

「なんで臭いが好きなの？ 意味が分かんないんだけど」

「……………」

「じゃあさ、こういうのも好きな訳？」

机に座る美希。宙ぶらりんの足から、上履きが音を立てて落ちる。

床に落ちた上履き。露わとなった美希の靴下が、床へと座る怜の眼前に迫った。白い靴下である。半日も穿いていれば、黄色く薄汚れてしまうものだ。

勿論、臭いも相当なものだろう。

足の裏は、人体で最も汗を掻きやすい箇所の一つと言われている。

そんな薄汚れた白い靴下から、美希が艶めかしく指を動かしていく。

正直に、それは怜が最も胸躍る光景だった。

馬鹿正直に答える気も無く、無言で居ると次第に美希が苛立ち……

「ねえ、言つとくけど、もう怜ちゃんは王子様じゃないんだよ……」

「うっ、あつ……」

続いて美希の胸が躍る。

みんなの憧れだった怜。

自分も、心から慕っていた怜の顔に、自らの足を靴下越しに押し付けたのだ。

ゾクリ。

年上の男子に。王子様の先輩に。自分が恋した相手に、なんて背徳的な行為か。

汚く、臭い靴下で怜の顔を擦る。片足でグリグリ、グリグリ……

部室に入った瞬間、怜が扉を開いたように……

美希の性癖が萌芽したのも、正しくこの瞬間だった。

「て、抵抗しないでよ。怜ちゃん。す、好きなんですよ……こういうの」

「うっ、な、何日取り替えてないんだよ、この靴下……」

「ちよっ、ちゃんと一日ごとに替えてるからッ!! し、失礼すぎでしょ、怜ちゃん。

まだ自分の立場が分かってないみたいじゃんッ!? ほらあ、ちゃんと足を持ってよ。

疲れちゃうじゃん。んっ、ふふっ、怜ちゃん……汗掻いてるから、わざわざ拭いて

あげてるんだよッ。もつと、こっち来てッ!!」

冷汗を流す怜に対して、美希からは興奮した熱い汗が流れ込む。

気付けば、背中までぐっしりと汗で濡れていた。

ヒトの顔に足を押し付ける行為は、それくらいの背徳感。フラストレーションが急激に溶けていく。歓喜の声を叫びたい気持ちで一杯だった。

吐息が荒くなり、真っ赤になった顔も蕩けそう。

だけど、優位性を保つ為にも必至で自制する。

あつという間に片足だけでは満足に至らず、美希は身体を撓らせながら、両足で怜の頬を咥え込むと、何度も何度も擦り上げていく。足に潰されて少し痛がる怜の惨めな顔……それだけで美希の背筋を戦慄かせた。

また、怜も枷が外れかける。不祥事の直後にも拘わらず、やっぱり性癖は感情をゆうに超越してしまうらしく、美希の饅えた臭いに性の炎が擦られていた。

これまでは女子の汗が染み込んだユニフォーム、体育着が専らだった。

それらは、どちらかというと「臭い」ではなく「匂い」だ。

脱いだばかりの靴に興味をそそられたことはあっても、それを嗅いだことはない。真の意味で女子の「臭い」を堪能したのは、これが初めてだった。

美希は足裏に汗を掻きやすい体質なのだろう。お世辞にも良い匂いとは言えない香りである。寧ろ、自分の脱いだ靴下よりも酷い臭い。鼻が曲がりそうな臭いだ。

なのに……

怜もまた、髓から情炎を燃やしていた。

だけど、反省の態度を示すために必死で自制する。

思いつきり声を漏らしたいけど……ガマンする。

美希も、興奮を声に出すことはなく……静かな空間の中に、年下の女子が年上の男子を足蹴にするという異様な時間が続いた。

「もしかして息止めてる？ ダメダメ。これは罰なんだよ？ 吸ってよッ」

「うっ……すう、はあ、んっ、は、はあ、はあ、んっ……」

「んっ……怜ちゃんの鼻が、アタシの足の裏につく、くすぐったっ……!!」

「はあ、はあ、み、美希……」

「なに呼び捨てにしてんのさ。さん付けしてよ。申し訳ないと思うならさ」

「み、美希さん……」

「……ッ!？」

ゾクゾクゾクゾクッ!!

新たに背筋から電流が走る。

なんせ、雲上の王子様だった訳だから……

そんな奴が、完璧にアタシに服従している……

美希は、軽い絶頂に陥っていた。

神経も敏感になり、怜の鼻先が擦れるだけで気持ち良い。

しかも、美希の命令で無理矢理に深呼吸している。

絶対に臭いだろうに……

貪りように……

変な声が漏れそうになる。何度もピクンピクンと身体が反応してしまう。

なんとか反応を面に出さないように努めると、それが汗となって毛穴より滴ってくる。部活用に着替えた体育着は、汗で背中にビツタリと張り付いていた。

ふと、美希が気付く。視線は怜の股間にあつた。

「もしかして怜ちゃん、興奮してる？ めちゃくちや勃ってんじやん……」

「こ、これは……むぐっ!？」

「はあ……マジでこういう性癖？ まあ、誰しも一つくらい欠点はあるものだって言うけどさ。こんな、私の足の臭さは……正直コンプレックスなくらいだったのに、こんなんで悦んじやうなんてツ、ああもう……!!」

「い、痛っ、はあ、はあ、よ、喜んでない。は、反省してるんだから……」

「ねえ、靴下脱がせて。アタシの」

「え？」

「早くッ。直接嗅ぎたいでしょ？　嗅いでよ。これは罰なんだから」

「わ、分かった……」

「……………ッ!!」

これ以上に足を押し付けていたら、どうなってしまうか分かったものじゃない。名残惜しさを噛み締めながらも、美希の本能的な危険信号により、怜の顔を剥がす。そして靴下を脱がせる。直接嗅がせに掛かった。

湿ったハイソックスを力ずくで取り、戸惑った顔で窺う怜。美希は言う。

「嗅いでよ」

「…………こ、このまま？」

「う、うん。早くしてっ」

「……………」

（ああああ、なにやってんだろ、アタシ。好きだったヒトに、アタシの靴下の臭い嗅がせちゃってるよ……絶対臭いよね。うう、これアタシが羞恥プレイ味わってる感じになっちゃってるっ）

後輩女子の靴下を、そっと自らの鼻へと押し付けた。

美希に押し付けられた臭いよりもダイレクトだ。

ありていに言えば、ひたすら臭い。甘酸っぱいとかじゃない。ただただ臭い。

だけと思ひ出す。

女子の脱いだ靴、穿いてる靴下に、異様に興味をそそられていた自分をいま、まさに念願が叶っているのだと気付く。

反省中だけど身体は正直のようだ。

突っ張ったペニスは、いまにもズボンを貫きそうなくらいに鋭利である。

中では、溢れた我慢汁が最高の不快感を満たしていた。

「すう、はあ、すう、はあ……」

「あゝあ、惨めだなあ。怜ちゃん」

「……はあ、はあ、はあ……」

「アタシも憧れだったんだよ？ 関東選抜メンバーのキャプテンだった怜ちゃん。

学生のバレー部員で知らない人は居ないくらいの有名人。関東の女子バレー部員のアイドル。オリンピックの最有力候補。怜ちゃんに恋してた女の子、めちやくちや居たのに。怪我が原因でマネージャーになったって聞いたから、アタシも遠くからこの学園に通い始めたのに。あゝあ、なにがあるか分からないね」

「……ごめんなさい」

「あははっ、謝ってばかり。でも確かに、こんな有名人が不祥事を起こしたってなったらテレビレベルのニュースだもんね。もう絶対に逆らえないもんね」

「なんでも……するから……」

「……じゃあ、さ。嗅いでよ。此処の臭いも好きでしょ？」

「……分かった。わ、分かりました」

美希の股間も愛液で濡れ切っている。

もうガマンも限界だった。

机の上でM字に開脚する美希。中央には、僅かに湿りが見える局部。

優位性もクソも無い。一秒でも早くオーガズムに達したいのだ。

美希は、ブルマ越しのクンニを命令した。

「ふう、ふう、ふっ……」

「んはああっ、フツーのクンニすらしたことあるのに、な、なんか違うっ……」

「はあ、はあ、はあっ、み、美希、さん……」

「怜ちゃんの吐息っ、あたってるッ、あああッ……ね、ねえ、臭い……嗅いでよ。好きなんでしょ。い、いくらでも嗅がせてあげる。ブルマ越しに……嗅いで」

「分かりました。んっ、はあ、はあ、はあ、すう、はあ、すう、はあ……」

「あああああああああーっ!! ヤバイヤバイヤバイヤバイッ!! 恥ずかしいっ、あああっ、こそばゆい。気持ち良いっ、むずむずするっ、な、舐めなくて良いからッ、に、臭い、そのまま嗅いでえええッ!!」

怜の頭を両足の太腿で閉じ込めると、吐息と鼻を吸る音が漏れ聞こえてくる。それが……あまりにも淫猥で。脳が溶けそうになる。

怜の見えない所で漸く思いつき顔を崩す美希。

目はトロンと蕩けており、油断すると涎が下まで降りていく。

初めて味わう不思議な快楽。例え鼻先が局部に触れていなくても、オーガズムに達していたかもしれない。身体の何処にも触れていなくても絶頂したかもしれない。いわゆる「脳イキ」を初めて味わう美希だった。

「うぐ、ふうっ、ふうっ、も、もつと、鼻、くっ付けて……思いつき吸ってッ」

「ふぐッ!? んっ、ふうーっ、はあーっ、すうーっ、はあーっ」

「ああああああ………♥」

挟み込まれた怜の頭を、更に手で押し込んでいく。

濡れたブルマに鼻が押し当てられる。

そのまま、グリグリと。次いで怜の熱い呼吸が繰り返される。

脳イキからの、通常のオーガズム。

粒のような細かい絶頂がビチビチと毛穴に弾かれていった。

「こういう臭いも、その、好きなの？」

「……………まあ」

「ナマでクンニしてくれていた時は、そんなの全然感じなかったけど。もしかしてアタシのナマのマ●コより、ブルマ越しの方が好きってことなの？」

「そ、そんなことは……」

「怪しいな。思いつき問いただきたいけど、なんかアタシの方が落ち込みそうだから聞かないことにする」

「あ、ありがとうございます」

「じゃ、じゃあ続き。アタシがイイって言うまで続けてッ!!」

「は、はい……」

（……でも、アタシもいまの方が興奮してるかも。不思議）

（下着の生地が擦れて気持ち良い……ああ、このままもつとイキたいのっ!!）

怜が見てないのをイイことに、美希が自らの手で乳房を按摩し始める。

美希も、性の口火を切ったのだ。

雲上だった筈の怜を口で支配する快感。年上の先輩に「さん付け」される快感。

怜の、見つとも無い姿に、どうしようもなく興奮してしまうサドに目覚めたのだ。

（もう……怜ちゃんはアタシのモノ。明日も、明後日も……）

（ああっ、ヤバイ。もつともつと怜ちゃんを惨めな目に遭わせたいって思っちゃう。もつとグチャグチャにしたいよお……あああ、次はどうしようかなあ……!!）

憧れのマネージャーの奴隷化に成功。今日が、その一日目である。

怜はSNS界限でも割と有名なのだ。

まず、素体が最高レベルで良い。

そしてバレーは全国区レベルである。テレビや雑誌にも出たことがある。

しかし、怪我でリタイアという悲劇のヒロイン属性もある。

何万人というファンが付いている。テレビにも出たことがある程だ。

SNS界限では、毎日のように怜に愛を捧げんとする女性ユーザーが見られる。

だから、怜を妬む者も多い。かなり多い。

人気であれば人気であるほど、もしも不祥事を起こした時は、それだけ反発する。

マネージャーという立場を使って女子部員の汗まみれ体育着でオナニーをしていた、

なんて明るみになったら……と、聡明な怜は思い至っているのだろう。

完全に降伏した状態だった。

あの怯え切った怜なら、なんでも言うことを聞いてくれそう。

そう実感した美希は、恍惚とした表情で明日を夢想するのであった。